

WEST PRESS 5



DISCUSSION WEST meets 五十嵐 淳

「そもそも僕自身、あまり地域性というものを意識することがない」

建築家・梅林克が興味を持つ建築家たちを訪ね、ディテールに対する考え方や設計手法を聞くシリーズ。第5回となる今回は、北海道を拠点に活躍する建築家、五十嵐淳が手がけた最新作を訪ねた。札幌市内の住宅地に佇む小さなアトリエは、外観は閉鎖的でありながら、内部空間は驚くほどの広がり、と繊細な光に満ちていた。たくさんの扉が、「向こう側」にある空間を想像させる。扉を開くと、壁や床面に反射したやわらかい自然光が流れこむ。ここで貫かれているのは、使い手の快適さを中心に考え、内側から発想するという設計手法だ。この五十嵐の手法は、日本ではユニークな地域条件を持つ北海道という場所性と、どういった関係があるのだろうか。そしてドアハンドルではなくノブを好む、という独特のディテール観には、どんな背景があるのだろうか。

梅林 この建物はかなり変形した一室空間ですが、どういった用途に使われるのでしょうか。

五十嵐 お施主さんの住まいに隣接するアトリエで、フラメンコを踊るスタジオにも使われるスペースです。採光は、扉の向こうにあるバッファゾーンを介して行っています。

梅林 デビュー作の「矩形の森」もそうですが、五十嵐さんのつくる建物は、どちらかと言えば閉ざされた空間が多いですね。

五十嵐 「カーテンを閉めなくてもよい建物を」と言われたので、間接光を使うことを考えました。僕自身も、せっかく大きな窓が開いているにもかかわらず、カーテンを閉めっぱなしにしているような家は嫌なんです。北海道という開放的な建物がイメージされることも多く、実際にそうしたものもあるのですが、僕の建物は違いますね。

梅林 場所性と関係あるのかと思っていましたが、違うんですね。コンテキストから自由で、何というか、うまくはだけているなあ、という印象です。

五十嵐 そもそも僕自身、あまり地域性というものを気にすることがないんです。場所のコンテキストよりも住む人にとつての快適さを優先させた結果として、こうした建物になっています。寒さやコストといったものが閉じた建物をつくる理由にはなっていますが、それはどんな地域にもある無視できない条件の一部で、根本的な動機ではありません。

梅林 気にしない、というのがそもそも特異ですよ。こちらは、どのように発想されたのでしょうか。最初からこういう形だったのですか？

五十嵐 当初は外側に機能をおさめて内側をアトリエとする、「矩形の森」とも共通するような入れ子状の空間を考えていました。ですが、徐々に形が変化して外に機能が突き出していきました。扉を並べた理由は、物理的には狭くても意識の上で広がりを感じられるように考えてのことです。たとえばヨーロッパの宮殿では、たくさんの扉が連なっているせいで延々と部屋が連続していく感覚が生まれます。いわば意識の上でのバッファゾーンをつくる、というような発想ですね。

梅林 まずは内側から考えられているんですね。

五十嵐 空間からです。空間から考えてしまうので、外側はあくまで結果です。

梅林 外壁の仕上げが特徴的ですが、どうやったのですか？

五十嵐 アスファルトルーフィングの下見張りです。下側を少し浮かせることで水の切れもよくなりますし、隙間に影が落ちるのでバラバラな材料でも質感が少し出ます。

梅林 断熱はどうしているのでしょうか。

五十嵐 100ミリのスタイロによる外断熱で、通常より性能を落としています。

梅林 とはいえ、一般的な日本の都市では十分ですね。構造は？

五十嵐 38×238ミリをモジュールとする2×10材を使っています。壁面は2×4材です。いずれもコスト面でも施工面でも有利です。

梅林 京都で同じことをしたら高くつきますね。在来工法のほうが安いので。

五十嵐 北海道は全体的に工費が安いんです。

梅林 そうですね。私は木製サッシを北海道の旭川でつくっているんですが、東京でのおよそ1/3の価格になります。

五十嵐 木造の技術にもコストがかかりますね。昨年関東圏ではじめて建物をつくったのですが、そんなに難しいことをしようとしたわけではないのに対応していただける工務店が見つかりませんでした。結局、北海道の稚内から木を刻んで持って行ったんです。

北海道という地域性を積極的に獲得する行為を誘発する空間とドアノブ



五十嵐 淳

Jun Igarashi
1970年 北海道生まれ
1997年 五十嵐淳建築設計設立
現在、東北大学・名古屋工業大学・
北海道工業大学非常勤講師
主な受賞歴
日本建築学会北海道建築奨励賞(1996)、
第19回吉岡賞(2003)、大阪現代演劇
祭仮設劇場コンペ最優秀賞(2004)、

BARBARA CAPPOCHINビエン
ナーレ国際建築賞グランプリ(イタリ
ア、2005)、American Wood Design
Awards 2006 / Best of Residential
グランプリ受賞(アメリカ、2006)、AR
AWARDS 2006 HONOURABLE
MENTIONS (イギリス、2006)、JIAH本
建築家協会北海道支部住宅部会
大賞(2009)、第21回JIA新人賞(2010)



小さなアトリエ
所在地 北海道札幌市
設計 五十嵐淳建築設計
用途 アトリエ
敷地面積 395.71m²
建築面積 40.35m²
延床面積 39.11m²
階数 地上1階
構造 枠組壁工法

WEST VOICE

自転車に乗ると、その日の空気を直に感じることが出来ます。同じ場所を通っても毎日違う感情が呼び起こされるんですね。建築金物も同じで、建物の中で日常的に触れる唯一の部分ですが、日々のさまざまな気持ちを受け止められる商品でありたいと思います。WESTはこの秋に引き戸のシリーズ「Agaho pull」を発表しました。和洋問わず、使いこなすほどに住み手の手に馴染む自信作です。ぜひお試しください。

WEST代表取締役社長 西康雄・談

梅林 そういった事情も含めて北海道にしかできないものができているように見えます。どんな場所でも与条件の中で特異性が出ます。そうした特異性を自分で獲得していくことに意味があるのではないのでしょうか。世界的な潮流もそうやってきていると感じます。元々存在する地域性に乗っかるのではなく、自然体で新しいローカルを積極的に掘り起こすようなことが、世界中のあらゆる業界で起きています。ところで扉に採用された金物は、レバーハンドルではなくノブなんですね。

五十嵐 僕は「握り玉」が好きなんです。レバーハンドルは「引っ掛ける」という感覚が強いと感じますが、そうではなく、握って、引っ張りたい。おそらく手ごたえを大事にしたいという気持ちがあるのだと思います。

寶角 こちらのノブは、分銅のつまむ部分を形にしたものです。まさしく握るという行為から形を発想したんですよ。

梅林 レバーハンドルの場合にはハンドルのサイズからスケールがわかってしまうけど、ノブなら点として見せることができますよね。

五十嵐 握り玉のほうが、扉のキャラクターが出るような気がします。レバーは性能から生まれる意味が前面に出すぎてしまうというか。

寶角 レバーは誰がどうやっても開きますが、ノブの場合、機能を補足することを人間に期待している側面があります。人間なら握れますし、握ったら回せるだろうと。

五十嵐 使い手に意識してもらわないと機能しないんですね。

寶角 使い方を想像させることができるところが、面白いんですよね。ただドアノブは現在、ユニバーサルデザインにはそぐわないという事情もあって、市場的には少し弱いんです。

西 お好きな方はいらっしゃるのですが。

寶角 だから、これだけ並べて使っていただくと、うれしいですよ。

西 複数のノブを使っていたとしても、普通は部屋ごとにバラバラに散らばってしまいます。このアトリエではまとめて見られるので、ノブに映り込んだ光や室内の様子の微妙な違いも楽しめます。

寶角 このノブはアルミを削って磨いてつくったもので、映り込みを意識してデザインしてはいるんですが、並べたときの効果は計算外ですね。

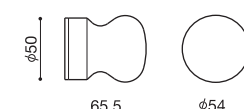
五十嵐 今回採用してみて、質感が良いものは空間にも良い、という再発見がありました。僕自身はポリカや樹脂、アクリルなど、比重でいえば底辺に近いほど軽いものも昔から好きなのですが、比重が重いもの、劣化しないものに人間は引かれますね。

Next 近藤 康夫



東京オフィス/ショールーム

Agaho basis Door Knob 194



価格 ¥11,500 (ノブのみ)~



WEST CORPORATION

TOKYO OFFICE / SHOW ROOM
5-11-15 MINAMI-AOYAMA, MINATOKU, TOKYO, 107-0062 JAPAN.
TELEPHONE: 03-3499-9260 FACSIMILE: 03-3499-9263

OSAKA OFFICE / SHOW ROOM
4-3-22 IMABASHI, CHUOKU, OSAKA-CITY, OSAKA, 541-0042 JAPAN.
TELEPHONE: 06-6221-5777 FACSIMILE: 06-6221-5888

株式会社ウエスト

東京オフィス/ショールーム
107-0062 東京都港区南青山5丁目11番15号
TEL: 03-3499-9260 FAX: 03-3499-9263

大阪オフィス/ショールーム
541-0042 大阪府大阪市中央区今橋4丁目3番22号
TEL: 06-6221-5777 FAX: 06-6221-5888

WEST PRESS 5
2010年11月15日発行

Art Direction:
藤脇慎吾
Text:
平塚桂 (はむ企画)
Photo:
繁田論 (Nacása & Partners Inc.)
Edit:
publica